

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十二)『佛國禪師法語』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	三田國文 No.56 (2012. 12) ,p.60- 67
JaLC DOI	10.14991/002.20121200-0060
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20121200-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十二)

——『佛國禪師法語』翻刻・略解題——

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『佛國禪師法語』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される¹⁾。

ここに紹介する『佛國禪師法語』は、大応国師南浦紹明とともに「二甘露門」と称された仏国禪師高峰顕日(一二四—一三二六)による仮名法語である。仏国禪師は、後嵯峨天皇の皇子として生まれ、十六歳の時に東福寺聖一国師のもとで出家。その後無学祖元に師事し、下野国那須の雲巖寺の開山となった。夢窓疎石を法嗣に出し、北条貞時・高時父子の帰依を受けるなど、鎌倉末期の関東禅林の主流を形成した臨済僧である。

その教説については、『仏国国師語録』等により窺え、『仏国禪師御詠』や『仏国禪師家集標注』からその詠歌を知ることができる。しかしながら、仮名法語については、「道書類」の他の禅宗仮名法語とは異なり、版本の存在を聞かず、これまで京

都大学附属図書館蔵『仏国禪師法語』が知られるのみであった。両者には大小の異同は見られるものの、同内容の書物とみなすことができ、本書の出現によって、仏国禪師の仮名法語に二種の写本が確認されたことになる。しかも、この京大本は、近衛家伝来の書物群からなる近衛文庫に収められており、伝来状況からみても、近世初期の近衛家周辺という極々限られた場で享受されていた可能性が指摘されよう。

なお、京大本は本書と共通する「仏国禪師法語」の後に、「国師の法語」として、別の禅宗仮名法語を合写しており、そこには、前号で紹介した「道書類」の『拔遂仮名法語』内に付された夢窓疎石の仮名法語との共通箇所も指摘できる³⁾。あるいは、同じ系統の夢窓の仮名法語から、京大本、「道書類」本のそれぞれが抄出したものかと推察される。

書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一ヨ
- ・ 形態 写本。一冊。仮綴。
- ・ 寸法 縦二八・六糎。横二二・二糎。
- ・ 表紙 本文共紙。楮紙。左肩に「仏国禪師法語」と打付墨

書。

・内題

佛國禪師法語

・丁数 墨付き二五丁。

・本文 半葉六行。漢字平仮名交じり。字高約二三・八糎。

・奥書 なし。

・印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

〔注〕

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。
- (2) 大取一馬氏「仏国禪師御詠」伝本考―禪僧の和歌研究の内―」（『中世文学論稿』一、一九七五年四月、西山美香氏「仏国禪師家集標注」翻刻と紹介」（『大倉山論集』四六、二〇〇〇年九月）等参照。
- (3) 拙稿「陽明文庫蔵『道書類』の紹介（十一）『拔達法語』翻刻・略解題」（『三田國文』五五 二〇一二年）。

附記

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金「若手研究（B）」（課題番号二二七二

〇〇九〇）による研究成果の一部である。

【翻刻】

佛國禪師法語

佛國禪師法語

せそん西天シテンにいてたるま、東土トウドにきたり給ふ事、別ワカのみちにはあらず、人をさとらし

めんかため也。それまよふといふは、先生にくらくし、それさとるといふは、本心をあきら

むるをいふなり。おほくの本心をあきらむる

道をしめす事、しなくなり。あるひは、きやうを

よみ、あるひは念仏を申、たらにをみて、そうを

うやまひ、あるひはかうをたぎ、花をさして、

みな仏法のわさい、つれもほとけになるへ

き事、むなしからすといへとも、これらはみな

そうのけうにして、むゐのことはりをそ申

ける。きくをもつて、たるまさいらいし給ふ。ふりう

もんじ、ぢきしにんじん、けんしやうなり。

佛のむね也。そのむねといふは、たゞ心をあ

きらむるをいふ也。此心をあきらむるみち

たゞぜんにすきす。それさせんとは、しんに

したかひて、おこる心のみたれをいふ。ざせん

いふは、みたれたる心をあきらむるをいふ也。かな

らすしも、てあしをくみ、かうへをうこかさす、

なをさとるといにはあらず。初心シンシンの人は、つねに

〔表紙〕

〔1オ〕

〔1ウ〕

〔2オ〕

心をしつめて、ふとんのうへにさすへし。ぎやうぢうぎぐわのしきのうちには、これ心をしつめて、みなたしくするゆへなり。およそ人のならひは、きみにつかへ、身をかへりみ、あしたよりゆふへにいたるまで、あるひはいかり、又はほしき、おしき、にくき、いとおしきより、別のおもひなし。心をあきらめされは、すなはち地ごく、がき、ちくしやう、しゆらに、おつへし。さとれば、そくしんしやうふつにこゆへし。これをもつてさとらしめんかためのさせんなり。それさせんようしんおほくのことのはになし、たこしんのこうあんをもつにすぎす。こうあんのたとひおほしといへとも、いつれにてもく一つもつへし。一しんわつかに心やふれぬれば、せんくまんく一ときにやふれ、いはゆるくといふは、文字モンゴ言句ゴクのくにもあらず。こうあんといふは、いまのむのじなり。此むのしは、一字なりといへとも、むりやうむへん、しやうしのきづなをさり、ひやく千万おくのうたがひをやふりつる心也。これ仏にもそうにもこゆる一しなり。およそこうあんもたざらんときは、一さいのまうねんおこる也。おこるとしらは、すなはちに、むと心をかけてみるへし。ゆめくへちのねんをおこされ。ぎぜんのうちからよは

「(2ウ)

きほとはわするゝ事おほし。うたかひの心をおこして、たいくつする事なかれ。もしうたかひをなして、ねんをおこさは、いつれの日々あきらめん。たしくのをろかに、心さしのうすきによりて、さとりをうる事かたし。されは、佛のたまはく、一ねんおこさは、すなはち、たがふとの給へり。まことにおもふへし。心のみなもとは、もとよりこくうとひとしくして、きはまりなる事なし。いかてかうたかひの心をもつて、きはまりなきこくうをはかるへき、うたかひとねんをやめて、一すちにむともつへし。又むの字まことおもふ事なかれ。かくのことくしゆぎやうして、ひさしく月なからは、あきらめん事やすかるへし。又さとりおそしとおもふ事なかれ。たしく心のよはき事をなけくへし。かやうにしゆぎやうすとも、さとりをひらかすは、さいこりんじうのとき、ひころのしんり、きをわすれすして、一すちに、こうあんを心にかけて、すこしもまうねんをおこさすは、たとひ諸シヨブツ仏ブツきたつて見ゆるとも、ねんをどうじてよろこぶ心なく、あくまあらはれてなやますとも、をとろく事なかれ。心にかけて、さうあひなく、一さいのねんをおこされは、かならずむねをあきらむへし。たとひ一念のまうしうによりて、こんじやうにさとりをひらかすとも、せんはうしゆぎやうのうちからによりて、らいしやうをは、かな

「(4ウ)

「(5オ)

「(5ウ)

「(6オ)

らすさとりをひらくへし。もし又心さしつよく

「(6ウ)

とも、やまひのしなによりて、身おとろへちからよはくして、くつうにせめられて、りん

じうみたれたりといふとも、せんはうをふかくしん

したらん人は、あくだうにおつへからず。たとひ

千万に一つもふしぎのごうゐんにひかれて、あく

だうにおつる事ありとも、五かい十ぜんをたもつて

「(7オ)

人間天上にむまれたらんよりも、念ネン佛ブツわう

じやうして、さいはう九ほんにむまれたり

とも、かうよりも、仏にらん事はやし。これわ

たくしのことにはあらず。せんとかのをし

へなり。たとへは、金コウネはつちのなかにあれとも、くつ

る事なく、水のなかにありとも、おぼるゝ事なし。

「(7ウ)

いはんや、すこしも心のみなもとをうかゝひさとらん

人は、中々申をよはず。ぎぜんしゆ行のはかり

事、これにすぎず。をのく此ほうごをぜん

ちしきとして、日夜にわすれず、しゆ行せば、

あきらめん事うたかひなし。かなしきかなや、

「(8オ)

一生すきやすし。万事マンジみな夢ユメまほろしの

ことし。十せんでいわうもひさしからず。百

ねんニゑいぐわもをはりあり。人のちゑかしこし

といふも、かならずしもきやうろんしやうげう

をよみならひしれるにはあらず。たゝかやう

のことほりをしり、世をいとひ、しのひこゝろ

「(8ウ)

あるを、かしこき人とは申也。たゝしこと葉
にもべかたく、筆にもつくしかたきは、

そうへつの文字モンジをもつて、一へんにおちて、こ

しうをくやうする物は、ますくみなとも

こをるくやうして、仏ホトケをもとむる物、りに

まよふ心をはなれて、仏をもとむるものは

むねをえかたし。此心これほとけなりとしんす

るとも、又まよひやあはれなるかなや、ときをう

つしても、日をかさねても、おこしかたきは、ほ

だいしんなり。としわかく、よはゐたけてもなしや

すきは、りんゑのごう也。しかるに、仏のまします

所をきけは、しゆぎやうの心にまします

也。さとりのみなもとをきはむれば、まよひの

ほかにあらず。たゝしるとしらさると也。い

たるといたらさるとによれり。しかりとはいへ

とも、仏道ブツドウのそみかたきは、しん心のをろか

なるゆへ也。はかなきあそひたはふれをろ

かなるうれへ、よろこひに心をつくし、朝夕チウセキ

のけふりをたつるはかり事までも、なに事かち

ごくのごうとならざるや。露ツツよりもはかなき

いのち、夢ユメよりもあだなる身もちなから、いつ

まてか、おもひもたゝざるへき。なに事につけて

も心をとむるは、みなごういん也。かゝるいたつら

事のためにすてやすき身を、仏道ブツドウのためにす

「(10ウ)

心をたゞしくして、ねんをおこさるをいふ也。せんをおもふ事なかれ。何事かぢごくのくとならさるや。みな一念のなす所也。わつかに、ねんを

おこせば、みなあやまる。此ゆへにしんしんめいにいわく、一心しやうぜされば、万法にとがなしといへり。成、仏のぞみあらん人は、仏になるへきぬしをしるへし。此ぬしをしるへしとおもは、

「(11オ)

たゞその一ねんのしたについてたつぬへし。一さいのせんをおもひ、あくをおもひ、いろをみ、こゑをきくものは、これ何物そと、みつから

ふかくたがは、かならずさしとるへし。さとれば、すなはち佛なり。ほとけのさとりは、一さいしゆ生の

「(11ウ)

一心也。しんたいもとより、きよくして、一さいのきやうがいそむる事なし。女人の身にあるときも、女人のさうにあらず。おとこの身に

ある時も、おとこのかたちにあらず。いやしきみにあるときもいやしき色もなし。たつとき身にある

「(12オ)

ときもたつとき色もなし。たとへは、こくうかはる色なきかとし。天地やふるゝときあるとも、こくうはたゞ名のみありて、さらにかたちとる

へきなしといへとも、十方せかいのうち、みなこくうにして、あまねからすといふ事なし。一心も又かくのごとし。しきしんのむまるゝときも一心はししやうする事なし。色身は死するるときも、一心はしする事なし。又かたちのみるへき身もなしと

「(12ウ)

いへとも、つうしんにみちゝて、めにものをみるも、みゝに聲をきくも、はなにかをかぐも、くちに

ものをいふも、てをうごかし、あしをはたらかすも、一心のゆふにあらずといふ事なし。此一心をはなれて、ほかにむかひて佛をもとめ、法をもとむるを、まよひの衆生となつて、此心これ佛なりとさと

る人を、仏となつてたり。此ゆへにしん心をさとらすして、成仏したる衆生なし。此心は六道のしゆしやうに、をのゝくそくして、ひとりとなる、

事なし。をのゝくこくうよろつ所の所は、みちみつる「(13ウ)

かことくにしてある事なし。ほとけにしやへちな

しとは此いはれ也。諸佛此心をさとりて、衆生にこれをしめせとも、衆生はぐちどんごんにして、うたかひにふかくちやくして、此むるの本心しやうしんの佛をしんじえざるゆへに、たとへはもつて

とくには、此心によいほうしゆとなつて、あるときはこれを仏性となつて、あるときは大道となつて、

「(14オ)

あるときはあみたとなつて、ある時は大つうちせうふつとなつて、あるひは地さうとなつて、ある時はくわんをんとなつて、あるときはふげんとなつて、

あるときはほうどうと名つて、ある時はぶものしやういせんほんらいのめんもくととなつてたる。六道のうあしやうとなつて、一さいの佛ほさつの御なは一心のいみやうなるかゆへに、みつかからわか心の佛をしんすれば、一さいのしよ佛をしんするにあたる

「(14ウ)

なり。此ゆへに経キヤウにはく、三がいゆい一心シのほかは
べちのほうなし。心佛及衆生シツフクシユシヤウ此三つは、しや
べつなし。又一さいのきやうは、衆生の心性シヤウシヤウをさし」(15才)

たることはなるかゆへに、みつから一心を見る人か
一さいのきやうをひときよむにあたりたる。

此ゆへに経キヤウにはく、しゆたらシユのけうは、月を

さすゆびのことしといへり。しゆたらシユのきやうは

一さいなり。月をさすゆびとは、衆生の一心をさす

をいへり。一心をもつてないけをてらして、あきらか
なるを、月のせかいをてらすにたとへたり。此ゆ

へにきやうをよめは、はくたいのくとくあると

いふ。たタ此いはれをしらせんために、仏をくやう

すれば、成佛フツブツするといふは、一心のさとりをいふ也。ほ

とけのなをとなへ、きやうをならひよむを、たタさと

りのきしにつかんだため、ふねいかだにのりて、川カハを」(16才)

こえてきしにつきてのち、いかたをはなれて

いそくへし。此ゆへに千日センジツ万マンきやうをよみ

たらんよりも、此いはれをきキたらんくどく、かき

りなきまさりなるへし。又千年センネン万年マンネン此こととはり

をきかんよりも、一念しん心シヤウシンをみたらんは、かきり

なきまさりなるへし。あさきよりふかきに入ゆへに」(16ウ)

いふはかりなき、ぐちはかいの物、一念も佛の御な

をもとなへは、はしめてふねいかだのらんとする

ものゝごとし。ありかたきけちゑん也。もしいかたの

中にとゝこほりてさとりサトリのきしにつかん事

をおもはずは、これ大きなあやまりなるへし。
しやくそんは、よろつなぎやうなされし
ほとは、つるに成佛フツブツせず、六年ロクネン万マン事をなけすて、
ざぜんをして、しん心をさとりてすなはち
正覚テウカクをなして、一さいの大しゆのために、ぜん
ほうをとかれたる事を、一さいきやうとはいへり。
此ゆへに諸経シヨキヤウは、ほとけのさとりの一心より出
たることは也。此ゆへに一心は、しよきやうのみな」(17ウ)

もと諸佛シヨフツの母なりととかれたり。此一心はたタい
ましよ人のむねのうちにあり。六こんのぬしたり。
これをさとりとき、一さいのざいごう、一せつな
にめつする也。こほりをゆに入たることし。かやうに
さとりてのち、しん心シヤウシンこれ佛フツブツ也といふ事を

しるへし。心性シヤウシヤウもとよりあきらかにして、はし

めおほりなく、佛衆生のへたてもなしといへと
も、まうぎやうの心念シンネンにへたてられたる事、くも

の月のひかりをかくするかことし。しかれともく

ふうのちからによりて、まうぎやうのきゆる事、
風のくもをはらふがごとし。まうぎやうのねんたえ

ぬれば、仏性フツブツの心あらはるゝ事くもきえて

月のあらはるゝかことし。たタもとのひかりをあら

はず。はしめてあらはるゝにあらず。此ゆへに

しやうじりんシヤウジリンのくをまぬかれんとおもはハ、
生死シヤウジをつくすへし。しやうぢきをつくさんとやお

もはハ、ざぜんをつくすへし。くふうといふは、こう

「(17才)

「(18才)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

「(18ウ)

あんをふかくうたかふへし。こうあんのこんぼん

「(19オ)

はしん心也。しん／＼をさとりたきのそみふかきを、心さしとも道心ともいふ也。たゞごごくにおちん事を、ふかくおそるゝを、かしこき人ともいふ也。たゞだうしんの心さしのなきものは、地ごくのくのかなしきをしらざるかゆへ也。むかしほさつあり。女人なりしとき、一さいの

「(19ウ)

聲をきくをみつからくわんして、さとりをえたるゆへに、せそんなづけて、くわんぜをんほさつといへり。いまの人もそくしんそく佛のたいをゑ候はんとおもふには、たゞいまのものゝこゑをきくときにあたりて、此こゑをきく物は、これなる物そとふかくみは、わか心とくはんをんと

「(20オ)

へちならざる事をさとり也。此心はあるにもあらず。なきにもあらず。一さいのさうをはなれて、念のおこるをは、やめんとすへからず。たゞねんもおこりもせず、やみもせは、ねんにはいろはすして、たゞしんこれなは物そと

「(20ウ)

うたかふへし。ふかくうたかへといふは、さとらしめんがため也。しられぬ本心をしらせんとすれば、心のめくるみちたえて、いかんともせられすとき、ざぜんとはいふ也。さしてもかくのごとくにうたかひ、たちあにねてもさめても、たゞしん／＼をさとらざる事を物お

「(21オ)

ふうとはいふ也。うたかひの心のそこにとるるとき

うたかひ、にはかにやぶれてそくしんそくふつのしやうたいあらわるゝ事、このやぶれてかゝみのかくるゝ所なきかとし。十はうせ

かいをてらして、十方せかいはあとなし。此ときはじめて六道りんゑのみちたえて、むし

「(21ウ)

ざいしやうきえめつす。此とき心のうちのたのしみことはをもつて、のへかたし。たとへは、夢のうちにおちて、鬼ごく

そつにさいなまるゝとみて、くるしみかきりなき時に、そのゆめにはかにさめて、一さいのくるしみ、ひとつものこらざるがとし。此ときしやうを

「(22オ)

もぬくるといふ也。かやうにさとらん事、人によるへからず。たゞ心さしによるへし。佛と衆生とは水とこほりのことし。こほりにてあるときは、石かはらのことし。とけぬれば、もとの水にて

「(22ウ)

ゑんにしたかひてとゞこほる事なし。まよふときは、こほりのことし。さとれば、もとのみやうたいなり。こほりの中に水とならざるこほりなし。こゝをもつてしるへし。一さいの衆生と佛とはもとよりへたてなき事をたゞまよひの一念をへたてとするのみなり。まよひの一ねんとけぬれば、しゆしやうすなはち佛なり。ゆめ／＼たいくつの心をおこす事な

「(23オ)

すとも、くふうをたしなむ事ねんくたへす
して、心さしのうちにて、りんじゆしたらは、
らいせには、かならずさとるへし。けふよりしかけ
たる事の、つきの日は、はやくみちゆく

「(23ウ)

かことし。されはとてゆだんあるへきにはあらず
たゝいまにりんしうにあらは、何事かようにな
つへき。たゞざいごうのみ身にそへて、ぢご

くとならんを、いかせんさいはゐに、げだつの大
道あり。さきには、そくばくのは、みなえた

葉なり。たゝ此一くをむねにあてゝをのれ

「(24オ)

にかへりてみるへし。いかなるかこれ、しんしんの
佛ホトケと一さいの諸佛シヨフツのたいを、一目にみんとお

もふは、たゝわかしんくのたいをさとるへ

し。まことか、そらことか、きうにまなこを

つけてみよ。いかなるかこれしんくの佛と

もよくしんしんをさとれば、くわちうの

れんげひらきてまんぼホウうをふれとも、しほ

まず。しよ人此うちにあり。中くなにとして
しらするや。

「(25オ)